

〈原著論文〉

居住場所の違いによる日常生活での自然環境の必要性と環境保全意識の関連性について

——都内幼稚園に通園させる母親を対象として——

石井 晶子\* 澤村 博\*\*  
高橋 正則\*\*

**The relationship between people's places of residence to the level of  
natural environment in everyday lives and  
their consciousness for environmental conservation**

——A research on mothers who send their children to  
kindergarten in the urban areas of Tokyo——

ISHII Akiko\*, SAWAMURA Hiroshi\*\*, TAKAHASHI Masanori\*\*

Abstract

With both mothers of children who go to kindergarten within 23 wards of the Tokyo metropolitan area, namely the very heart of Tokyo, and mothers of children who go to kindergarten in the suburbs of Tokyo as the targets, a survey using questionnaire sheets was conducted. Considering the distance from the residences to the kindergartens and the places of residence as a part of natural environment just like the surroundings of the kindergarten, kindergartens were divided into two types. Namely the kindergartens in the 23 wards belonging to "urban model" and the kindergartens in the suburbs belonging to "suburb model". And how these types are related to the following five items was investigated: (1) the ideal lifestyle, (2) how they make their children get closer to nature, (3) how they see the regulation of environmental conservation, (4) how they see the development of nature, and (5) how much they have a sense of crisis confronting life.

The results of the survey obtained:

1. For mothers belong to urban model, natural environment is not necessarily important in the living nor working place. They have such lifestyle as to create occasions to get closer to nature as special activities in holidays, etc. Many of them agree to the regulation of environmental conservation and tend to disagree to the development of nature. There are many who have a sense of crisis confronting life.

2. For mothers belong to "suburb model", it is ideal to have natural environment in all areas of their lives, the working space as well-living space. They have such lifestyle as to get closer to nature in everyday life. Many of them disagree to the regulation of environmental conservation and tend to agree to the development of nature. There are few who have a sense of crisis confronting life.

---

\* 東海大学課程資格教育センター（非常勤） Licenced Professional Training Center, Tokai University

\*\* 日本大学文理学部 College of Humanities and Sciences, Nihon University

受理日：2001年10月12日

As a result of 1 and 2, it is inferred that their present behavior that consider for environment is not as act of pursuing coexistence with nature based on sufficient understanding of nature but rather an act that is stimulated by such factors as humans' sense of physical danger to them and for the sake of maintaining human society.

Key word: place of residence, urban area, way of getting closer to nature, awareness of environmental conservation, sense of crisis confronting life.

## 1. 問題の所在と本稿の目的

科学技術の進歩は、人間の生活空間やライフスタイルに利便性を与え、物質的に豊かな暮らしをもたらした。しかし「人間が豊かな生活をする為」という欲を正当化した行為は、地球環境を汚染し、自然界の生態系を破壊してきたのである。

特に都市部の生活環境は、利便的で快適な清潔感ある空間として整備し、自然も人工的に演出してきた。さらに休日には、まだ残る人間の手の余り加わっていない自然を求める余暇活動も行ってきた。このように人間は、自然の摂理を忘れ、自然との共生を忘れ、自然を支配・管理し、自然に犠牲を強いてきたのである。その結果、人間と自然の関係は、共生・調和から開発・破壊という対立関係を成立させてしまった。そして対立関係となってしまった人間と自然の関係に深い反省が迫られ、自然との共生が叫ばれるようになった。しかし人々が現在日常生活で環境に配慮ある行動を促すものは、人間社会の存続の為だけではなく、自然環境の保全も意識したものであろうか。

環境へ配慮ある行動とは、産業社会が発達した現代から原始的自給自足経済社会の再形成を主張するものではない。また人間-自然の関係が、対立的関係や支配的關係を実現するものでもない。この人間と自然の関係のあり方というのは、人間の自然に対しての意識の持ち方に問題が潜んでいるのである。しかし現在都市部では、ありのままの自然と親しむ場所は減少している。それは子どもにとっても同様であり、自然と親しむことが日常的な遊び経験ではなく、親子で行く「特別な活動」となってしまうのである。それゆえ自然と親しむための非日常的な特別なレジャー活動は、単に人間の癒しのためだけに行われる行為となってしまう可能性がある。そこで自然と親しむレジャー活動のあり方を再構築していくためにも、親の自然環境に対しての考え方や環境問題をどのように捉えているかを明らかにする必要がある。

そこで本調査では、都内の居住場所の違いにより生活の中での自然の位置づけと自然との親しみ方、環境保全への意識との関連性について明らかにしていくことを目的とする。これらの現状を明らかにする作業は、今後の日常生活やレジャー活動での自然との関わり方、自然教育・環境教育のプログラムを構築する為の知見となるであろう。

## 2. 研究の視点

まず本章では、自然との親しみ方や環境保全意識に着目した先行研究を整理していく。そしてこれまでの研究の中で欠けていた点について検討する。

既に人間が自然と親しむことの重要性は、レイチェル・カーソンが著作「センス・オブ・ワンダー」(1995)の中で、カーソン自身の経験に基づき示されている。この著書では、カーソンが実践してきた子どもに対して大人の果たす役割も提示している。子どもにとって自然環境が生活の中で意味ある環境になることや、自然と共に生きていく方法や意識を持つようにする為には、大人の果たす役割は重要である。

この自然と親しむことは重要なものであるという前提からは、様々な視点から提言がなされてきた。小谷(1999, 2000)<sup>10)11)</sup>は、幼稚園内や園外の自然環境、公園緑地の役割、教員・保護者の協力を総合的に捉えその重要性を提言している。この幼少期の成育環境は、将来にわたるライフスタイルや自然との親しみ方などへも影響を与えることを澤村(2000)<sup>12)</sup>が言及している<sup>1)</sup>。また生活場面での自然との関わりについては、地域別にみた市民意識とその活用(広脇1985)<sup>16)</sup>、世代間にみる自然要素との関わり(山田1985)<sup>17)</sup>の差異性について明らかにされた。更に自然接触体験の希薄化は、農村児童にも起こっているとの指摘もなされた(木下1992)<sup>9)</sup>。そして海津(1997)<sup>9)</sup>は、自然と親しむ場所について「親子」「子どもどうし」「高齢者」の関係性に着眼している。

そして人間と自然の関係については武田（1993）<sup>13)</sup>が、次の3つの立場に分類している。第1の立場は、「自然は人間活動にとっての資源であり、人間の活動の増大・進歩のために、その資源としての自然を守れ」というもの。第2の立場は、「自然はそれ自体として価値があり、人間の手つかずの自然の価値を守れ」というものである。そして第3の立場は「人間もまた自然の一部であり、人間の生存基盤である自然を適切な状態に守れ」というものである。第1の立場は人間中心的な自然保護思想であり、自然自体を保護するのも結局は人間の為という発想に基づくものである。そして1960～1970年代にかけて欧米を中心に登場してきたのが、第2の立場である。これは動物解放論、自然自体の「権利」や「固有の価値」を重視したディープ・エコロジーという思想の出現にみることができる。そして第3の立場では、自然との交流の中で共生を目指すものである。この自然と人間の関わりの捉え方について鬼頭（1996）<sup>9)</sup>は、人間が自然に対して能動的に働きかけるベクトルを「生業」、人間にとって自然から受ける受動的な働きかけであるベクトルを「生活」と定義している。このベクトルが、近代的産業活動により全体的な関係から部分的な関係に変化し、自然と人間の関係のバランスが崩れたと捉えている<sup>12)</sup>。

さらに尾関（1995）<sup>9)</sup>は、自然破壊という現象は、人間と自然の関係だけの問題ではなく、人間相互が競争という攻撃的な態度をとり、人間の共同的存在性が見失われたときに、自然に対する攻撃的態度が支配的になり、自然と人間の共生も不可能となったと指摘している。そこで尾関は、この人間と人間、自然と人間の関係の孤立化を、「労働」と「コミュニケーション」の媒介によって共生への回復を図ることを提唱している。つまり自然との共生のためには、長時間労働を大幅に短縮し、自由な時間を回復することで、「人々の遊びを商品依存型の環境破壊的・消費活動的な遊びから、自然と人間の調和を前提とした自己確証的な遊びへと転換する」<sup>9)</sup>ことの必要性について言及している。

そして自然と親しむことだけでなく、環境保全に対して取組む示唆を与える論文の蓄積も進んでいる。その中で瀬沼（1998）<sup>14)</sup>は、地域作りの主体者である農村女性に着目し、生活面での共生認識の意識面と生活場面での実践面での乖離を指摘している。

以上のことから、これまでの人間の自然への無責任

さを反省し、日常生活で人間－自然の関わりを通して共生関係を形成していく重要性に関しての知見を得ることができた。しかし先行研究では、環境破壊が深刻化する状況で、自然と親しむことと環境保全意識を一連のものとして捉えた議論はまだ十分に蓄積されていない。つまり自然と親しむことと、自然と共生する為の環境保全意識との関連性については、さらに明らかにしていく必要がある。この点を明らかにすることは、人間と自然の共生関係を成立させ、促進していくための方法の礎となるものである。

では人間が自然環境を意識するのは、どのような場面であろうか。まず生涯の中で、自然環境を意識する大きな場面の一つとして居住場所を選択する機会があげられる。この居住環境は、子どもの成育環境としても重要な意味をもつ場所である。つまり子どもの成育環境は、親が選択した居住場所や、親のライフスタイルに影響を受けるのである。そうであるならば、まず親の自然に対する意識の持ち方を明らかにしていく必要がある。この親の意識を明らかにすることが、次代を担う子どもの自然観や自然との関わり方、環境保全活動を構築していくための布石ともなる。

そこで今回の調査では、都市部内での居住場所の違いにより、生活の中での自然の位置づけや親しみ方、環境保全意識との関連性を明らかにしていく。具体的には、居住場所を「都市内部」と「都市周縁部」に区分し、次の5項目との関連について検証していく。まず親が理想とするライフスタイルについて、親子で自然と親しむ機会について考察していく。そして「環境保全の規制」に対する意識、レジャー施設のための開発や宅地開発による「自然開発」に対する意識、「生命への危機感」の程度との関連性を考察する。これらの分析を通して、環境問題に取り組む上で、人間社会の存続の為だけでなく、自然を尊重しながら共生していく為の教育的課題を提示する。

### 3. 調査の方法

#### (1) 調査対象と実施時期

本調査は、2000年6月～7月にかけて都内幼稚園4園に園児を通わせる母親290名に対して質問紙調査（自記式個別調査）を行った。各幼稚園の教諭に調査の概要を説明し、配布方法は各幼稚園に一任をした。

## (2) 調査の枠組み

地域の実情に合わせた環境教育や環境保全への施策を構築する為には、居住場所の自然状況を考慮して考察することが必要である。そこで幼稚園の所在により23区内にある幼稚園を「都市内部型」居住場所、そして23区外の郊外地域にある幼稚園を「都市周縁部型」居住場所の2つに区分した。「都市内部」の2幼稚園は、いずれも交通量の激しい大通りや整備された住宅街に囲まれ、近隣には自然に親しむ環境が少ない場所に所在している<sup>\*)</sup>。また「都市周縁部」の2つの幼稚園は、周辺に大きな公園や散策コース等、日常的に緑と親しむことのできる環境がある<sup>\*)</sup>。園児の通園距離を考えた場合、幼稚園周辺の環境は居住場所周辺と類似した環境にあると考える。本調査での被験者の構成は、それぞれ「都市内部型」の居住場所に該当する人は100人(34.5%)、「都市周縁部型」の居住場所に該当する人は190人(65.5%)である。

また本稿では、被験者として現在幼稚園児を持つ母親を対象とした理由は2点ある。まず1点目は、子どもとの接触時間は、現況ではやはり母親が多いと推測されることからである。そして2点目の理由として現在幼稚園児の親である世代は、幼少期・青年期を、高度経済成長期・バブル期に過ごし、物質的に豊かな経済大国日本で成長をしてきた世代である<sup>\*)</sup>。この親の世代の環境への意識を探ることは、次世代の子どもに対する教育的課題を示唆することになる。

## 4. 結果及び考察

## (1) 理想とするライフスタイル

居住場所は、ライフスタイルを規定する重要な環境である。しかし居住場所を選択する際には、様々な理由により必ずしも希望通りの環境を選択できるとは限らないのが現状である。そこで本節では、まず母親が理想とする居住場所、仕事をする場所、休暇を過ごす場所について、「理想とする居住場所と仕事場所」(表2)、「理想とする居住場所と休暇場所」(表)に分けて検証した。

まず理想とする「居住場所と仕事場所」を表1のようにカテゴリー化した。

表1 理想とする居住場所と仕事場所について

タイプ1: 自然が豊かな環境に居住し、平日は都心部に通勤する  
 タイプ2: 自然豊かな環境に居住し、都心部に通勤しなくてもよい仕事をする  
 タイプ3: 生活や交通が便利な都心部に居住し、都心部に通勤する  
 タイプ4: 生活や交通が便利な都心部に居住し、都心部でない場所で仕事をする  
 タイプ5: 特に都心部や自然の中でといった生活場所・仕事場所にこだわらない  
 タイプ6: その他

表2 理想の居住場所と仕事場所

NA = 2

	理想の居住場所と仕事場所					
	タイプ1 (住)自然 (仕)都心	タイプ2 (住)自然 (仕)都心外	タイプ3 (住)都心 (仕)都心	タイプ4 (住)自然 (仕)都心外	タイプ5 こだわらない	タイプ6 その他
都市内部 (N=100)	34.0% (34)	17.0% (17)	32.0% (32)	3.0% (3)	12.0% (12)	2.0% (2)
都市周縁部 (N=188)	23.9% (45)	48.4% (91)	8.0% (15)	2.1% (4)	16.5% (31)	1.1% (2)

いずれも有意差 $p < .05$ 

表2から理想とする「居住場所と仕事場所」で特に顕著な差異がみられたものを3タイプ取り上げる。

タイプ1「自然豊かな環境に居住し、平日は都心部に通勤すること」を理想とするのは、「都市内部」の母親は34.0%、「都市周縁部」の母親は23.9%である。「都市内部」の母親の方が、「都市周縁部」の母親よりも割合が多い。そしてタイプ2の「自然豊かな環境に居住し、都心部に通勤しなくてもよい仕事」をすることを理想とする「都市内部」の母親は17.0%、「都市周縁部」の母親は48.4%である。「都市周縁部」の母親の方が、「都市内部」の母親よりも割合が多い。そしてタイプ3の「生活や交通の便利な都心部に居住し、都心部に通勤する」ことを理想とする「都市内部」の母親は32.0%、「都市周縁部」の母親は8.0%である。「都市内部」の母親の方が、「都市周縁部」の母親よりも割合が多い。

この3つのタイプから、居住場所の違いにより、次のような特徴がみられる。「都市内部」の母親は、日常生活全体で自然環境を必要としない、あるいは一部にあることを理想とする傾向にある。一方「都市周縁部」の母親は、居住場所も仕事場所も都心部へ行かずに自然豊かな環境で生活することを理想としている。つまり「都市周縁部」の母親の方が、「都市内部」の母親より生活全般において自然と関わるライフスタイルを好むことがわかった。

続いて理想とする「居住場所と休暇を過ごす場所」

について表3のようにカテゴリー化した。

表3 理想とする居住場所と週末や休暇を過ごす場所について

タイプA：自然豊かな環境に居住し、週末や休暇は自然と親しむ  
 タイプB：自然豊かな環境に居住し、週末や休暇は都心部で過ごす  
 タイプC：生活や交通が便利な都心部に居住し、週末や休暇は自然豊かな場所に出かける  
 タイプD：生活や交通が便利な都心部に居住し、週末や休暇も都心部で過ごす  
 タイプE：居住場所も休暇場所も特に都心部や自然の中ですと言った事にこだわらない  
 タイプF：その他

表4 理想の居住場所と休暇を過

NA=3

	理想の居住場所と仕事場所					
	タイプA (住)自然 (住)自然	タイプB (住)自然 (住)都心	タイプC (住)自然 (住)都心	タイプD (住)都心 (住)都心部	タイプE こだわらない	タイプF その他
都市内部 (N=99)	35.4% (35)	0.0% (0)	46.5% (46)	4.0% (4)	12.0% (12)	2.0% (2)
都市周縁部 (N=188)	61.7% (116)	1.1% (2)	14.9% (28)	0.5% (1)	20.2% (38)	1.6% (3)

いずれも有意差 $p<.05$

理想とする「居住場所と休暇を過ごす場所」について、表4から特徴的な2タイプを取り上げて検討していく。

まずタイプAの「自然豊かな環境に居住し、週末や休暇は自然と親しむこと」を理想とする「都市内部」の母親は35.4%、「都市周縁部」の母親は61.7%である。「都市内部」の母親の方が、「都市周縁部」の母親より割合が低い。そしてタイプCの「生活や交通が便利な都市部に居住し、週末や休暇も都市部で過ごす」ことを理想とするのは、「都市内部」の母親は46.5%、「都市周縁部」の母親は14.9%である。「都市内部」の母親の方が、「都市周縁部」の母親よりも割合が多い。

この2つのタイプから、居住場所の違いにより、次のような特徴を得た。「都市内部」の母親は、自然と親しむことは、週末や休日を利用した「特別な活動」としている傾向にある。一方「都市周縁部」の母親は、居住場所も自然環境があることを理想としていることから、平日・休日を問わず身近な環境として自然と親しむライフスタイルを理想としているのである。

上記表2、表4の結果から、次のような傾向があるといえる。日常生活を過ごす環境で、生活の一部、あるいは生活全般で都心を好む母親は、現実でも「都市内部」に居住場所をもっている。そして生活全般にわたって自然を位置付け、日常的に自然と親しむことを理想としている母親は、現実では「都市周縁部」を居

住場所として選択しているのである。

住環境は、大人のライフスタイルの基盤となるだけでなく、子どもの日常生活での遊び環境にも影響を及ぼすものである。つまり親が、住環境の選択条件として「利便性」を追求すれば、子どもの日常生活の遊び環境には、自然と日常的に親しむ環境が少なくなってしまうのである。

## (2) 親子での自然との親しみ方

次に、実際の居住場所の差異と親子で自然と親しむ機会との関係について見ていくことにする(表5)。

表5 親子の自然との親しみ方

NA=3

	自然と親しむ方法	
	日常的な活動	特別な活動
都市内部(N=100)	34.0% (34)	66.0% (66)
都市周縁(N=187)	62.0% (116)	38.0% (71)

いずれも有意差 $p<.05$

ここでは、親子で自然と日常生活の一部として「日常的」に親しんでいるか、あるいは休日などを利用する「特別な活動」としているかという2つにカテゴリー化した。

親子での自然との親しみ方が「日常的な活動」であると回答している母親は「都市内部」では34.0%、「都市周縁部」では62.0%ある。「都市周縁部」の母親の方が、「都市内部」の母親より、親子で「日常的」に自然と親しんでいるとする割合が高いのである。そして休日などを利用した「特別な活動」として自然と親しんでいる人は、「都市内部」では66.0%、「都市周縁部」では38.0%となっている。親子で自然と「特別な活動」として親しんでいるのは、「都市内部」の親の方が、「都市周縁部」の親よりも高い割合を示す結果となった。

本節と第1節の結果をあわせて考察すると、次のような傾向をみることができる。母親が理想とする自然との親しみ方が、親子での自然との親しみ方と同様の傾向を示す結果となった。つまり子どもの自然と親しむ機会を日常的にしていけるためには、子どもの遊びのあり方を問い直すだけでなく、親のライフスタイルも教化していくことも必要なのである。

ここまでの結果から、現在の居住場所とライフスタイルでの自然の位置付けや自然と親しむ機会との関連

は明らかになった。では居住場所と環境保全意識には、関連があるのだろうか。その点について、次節で検討していく。

### (3) 環境保全の規制に対する意識

前節までで明らかになった点から、自然との親しみ方が「特別な活動」である「都市内部」に住む人と、自然と「日常的」に親しむ傾向にある「都市周縁部」に住む人では、環境保全意識に対してどのような傾向があるのかを検討していく。自然環境に配慮していくというのは、人間社会の存続維持のためだけではなく、自然との関わりの中で環境全体を存続していくことである。これまでのように環境の破壊者となる経済優先のライフスタイルから、環境を修復・保全をしていくためには、様々な規制に取り組んでいかなければならない。そこで本節では、環境破壊を食い止めるために、日常生活で規制が課せられることに対して、居住場所によりどのような意識の違いがあるかを明らかにしていく(表6～表9)。

表6 生活水準を落とすことについて NA=8

	生活水準を落とす	
	賛成	反対
都市内部(N=95)	40.6% (39)	59.4% (57)
都市周縁(N=186)	25.8% (48)	74.2% (138)

いずれも有意差 $p<.05$

表6の「今の生活水準を落とす」ことについて賛成しているのは、「都市内部」に居住場所をもつ母親は40.6%、「都市周縁部」に居住場所をもつ母親は25.8%である。「都市内部」に居住している人の方が、「生活水準を落とす」ことに対して、「都市周縁部」の人より賛同する意志をもっている人の割合が高い。「生活水準を落とすこと」に反対である母親は、「都市内部」は59.4%、「都市周縁部」が74.2%である。「都市周縁部」の人の方が、「都市内部」の人より「生活水準を落とす」まで、環境保全のために生活を変えることについては消極的な傾向にある。

表7 国の規制について

NA=12

	国の規制	
	賛成	反対
都市内部(N=97)	90.7% (88)	9.3% (9)
都市周縁(N=181)	71.8% (130)	28.2% (51)

いずれも有意差 $p<.05$

次に表7は、「国が国民に対して環境保全のために負担を課す」ことについての項目である。賛成するというのは、「都市内部」に住む母親では90.7%、「都市周縁部」に住む母親では71.8%である。「国の規制」に対して、「都市内部」に住む人の方が、「都市周縁部」に住む人より賛成するという傾向にある。そして反対であるという母親は、「都市内部」では9.3%、「都市周縁部」で28.2%である。「都市周縁部」の人の方が、「都市内部」の人より、「国が規制を課す」ことについてやや消極的である。また今回の調査の自由記述欄には、「環境破壊を意識している人もいるが、無関心すぎる人も多すぎる」という回答もみられた。この回答に示されているように、規制を加えない状況では、環境保全への意識や行動について、個人差が顕著となって現れている状況にある。

表8 環境税の導入について

NA=9

	環境税の導入	
	賛成	反対
都市内部(N=95)	42.1% (40)	57.9% (55)
都市周縁(N=186)	25.3% (47)	74.7% (139)

いずれも有意差 $p<.05$

表9 ゴミの有料化について

NA=7

	ゴミの有料化	
	賛成	反対
都市内部(N=97)	55.7% (64)	44.3% (43)
都市周縁(N=186)	33.9% (63)	66.1% (123)

いずれも有意差 $p<.05$

では「環境税」の徴収(表8)と、「ゴミの有料化」(表9)の導入についてどのように考えているか検討していく。まず「環境税」の徴収に賛成するという母

親の割合は、「都市内部」で42.1%、「都市周縁」で25.3%である。そして反対とするのは、「都市内部」で57.9%、「都市周縁部」で74.7%となっている。「環境税」が導入されることに対しても、「都市内部」に住む人の方が受け入れるという人の割合が高いのである。そして表9の「ゴミの有料化」に賛成するという母親は、「都市内部」では55.7%、「都市周縁部」では33.9%となっている。反対であるとするのは、「都市内部」で44.3%、「都市周縁部」で66.1%である。この項目も「環境税」と同様に、「都市内部」に住む人の方が、「都市周縁」に住む人よりも賛成する人の割合が多いのである。ゴミの収集については、自治体が様々な分別回収を行うようになり、以前より住民は日常生活で自ずと環境へ配慮することが意識化されるようになってきた。また既に東京都に所在する企業に対しては、ゴミの有料化は実施されている。そして2001年4月から、個人に費用負担が課せられる「特定家庭用機器再商品化法」（通称「家電リサイクル法」）も施行された。しかし今後さらに物質の循環を促進するために、個人のライフサイクル全体を視野とした転換が迫られていくことになるであろう。

本節で取り上げた「生活水準を落とすこと」「国の規制」「環境税」「ゴミの有料化」の全項目で、「都市内部」に居住場所をもつ人の方が、「都市周縁部」に住む人より賛成する人の割合が高い結果となった。

ここで第1・2節までで検討した理想とする生活の中での自然の位置付けや自然との親しみ方と、本節での結果をあわせて考察してみる。前節までで、日常生活の中で必ずしも自然環境があることを必要としない割合が多い「都市内部」の母親の方が、日常生活で環境保全を意識している傾向がみられた。一方自然を生活の必需としている「都市周縁部」の母親は、必ずしも環境保全へ配慮するための意識を持っているとはいえない結果となった。

#### (4) 自然開発に対しての意識

第3節の結果から、日常的に自然と親しむ「都市周縁部」の人は、「都市内部」の人より「生活に規制」を加えられることに対して消極的であった。それでは自然を尊重するという点に関しては、どのように考えているのであろうか。そこで本節では、居住場所の違いにより、レジャー開発や宅地開発のために「自然開

発」をすることに対してのどのように考えているかという点をみていく（表10）。

表10 自然開発をする

NA=10

	自然開発をする	
	賛成	反対
都市内部(N=94)	50.0% (47)	50.0% (47)
都市周縁(N=186)	62.4% (116)	37.6% (70)

いずれも有意差 $p<.05$

「自然開発」に対して賛成である母親は、「都市内部」に住む人は50.0%、「都市周縁部」に住む人は62.4%である。そして反対である母親は、「都市内部」に住む人で50.0%、「都市周縁部」に住む人で37.6%となっている。「自然開発」に対しては、「都市周縁部」に住む母親に賛成する割合が多く、「都市内部」に住む母親に反対する割合が多い傾向にある。つまり今ある自然を守るという意識を持っている人は、「都市周縁部」に住む母親より「都市内部」の母親に多いのである。

前節までの結果とあわせて考察すると、日常生活全般で自然を必ずしも必要とせず、日常的に親しむ傾向にない「都市内部」の母親の方が、自然を残していくという意識をもつ人が多いのである。そして「都市周縁部」の母親は、生活場所に自然があることを求め、日常的に自然と親しんでいる人が多いが、自然を残していくという意識をもつ人は少ないのである。つまり日常的に自然と親しむ行為と、自然を守るという意識とは関連性が認められない傾向にあることがわかった。

#### (5) 生命への危機感

第4節までの結果から、環境保全意識というものが、人間、あるいは人間社会存続維持の為によるものであることが推測される。そこで本節では、環境保全の意識の背景の一因を探るために、居住場所の違いによる「生命」に対しての危機感の程度について検討していく（表11）。

表11 生命への危機感

NA=2

	生命への危機感	
	感じる	感じない
都市内部(N=100)	88.0% (88)	12.0% (12)
都市周縁(N=188)	71.8% (135)	28.2% (53)

いずれも有意差 $p<.05$

「生命に対して危機感」を感じていると回答しているのは、「都市内部」に住む母親は88.0%、「都市周縁部」に住む母親は71.8%であった。「都市内部」に住む人の方が、「都市周縁部」に住む人よりも「生命への危機感」を感じている人の割合が高い。また「生命への危機感」を感じていないとする母親は、「都市内部」では12.0%、「都市周縁部」では28.2%である。「都市周縁部」に住む人の方が、「都市内部」に住む人よりも「生命への危機感」を感じていない人の割合が高い傾向にある。「生命に対しての危機感」は、「都市内部」に住む人の方が、「都市周縁部」に住む人より切実に感じているという結果となった。

また調査用紙の自由記述欄をみると身体への変調について、次のような事例がみられた。例えば「都会から郊外へ移り住むことで、アレルギー体質だった子どもの体調が緩和された」、「子どものアレルギーにより、環境問題への意識が強くなった」、「子どもが生まれて環境問題を考えるようになった」などである。これらのコメントから、人間の身体的な変調が、環境保全に対してより関心を向ける要因となっているとみることができる。

ここで、本節の結果と第3・4節をあわせて考察してみる。「都市内部」の母親は、環境保全の規制へ賛成し、自然開発に反対する割合が高く、「生命への危機感」を感じている人の割合も高い結果となった。つまり環境保全意識を持つ要因の一つは、「生命への危機感」という人間の身体的な変調を実感することにあるという結果を得た。そして環境保全意識をもつ人の割合が少ない「都市周縁部」の母親は、日常生活では自然環境を必要としているが、それは自然環境に配慮した共生意識にまでは至っていないことが伺える結果となった。

## 5. おわりに

本稿で区分した「都市内部」「都市周縁部」という居住場所の違いから、求めるライフスタイルの中で自然とのかかわり方と、環境保全意識との関連性について検討してきた。調査結果をまとめると、次のような傾向をみることができた。

「生命の危機感」や身体的な変調を実感している「都市内部」の母親は、環境保全意識をもつ人の割合は多いが、自然環境を日常生活全般で必ずしも必要と

していないという結果となった。一方「生命の危機感」を感じている人の割合が少ない「都市周縁部」の母親は、環境保全意識をもつ人の割合も少ないが、日常生活全般で自然と親しむことを好む傾向にあった。これらの特徴から、環境保全意識は、人間と自然との共生のためではなく、人間の生命や人間社会存続のために促されていることを伺うことができた。つまり自然と親しむことと環境保全意識の間には、有意な関連性がないのである。

親の選択した住環境やライフスタイルは、子どもの遊び環境や自然との親しみ方も規定していくのである。そうであるならばまず親に対して、環境保全意識や、自然との共存意識、実際のライフスタイルの転換を教化していかなければならない。

今後は、「消費活動的な遊び」から脱却した自然との共存を取り入れたライフスタイルや、生活の豊かさの意味を問う機会を、行政が地域の実情に合わせたライフプランを提案していくことも課題としていかなければならないであろう。

## 注

- \* 1 : 澤村グループ(2000)では、大学生の幼少期の成育環境イメージを田舎と都会に分け、成人後の自然の親しみ方、将来のライフスタイルについて検討した。調査では、成育環境イメージが自然の親しみ方、関心、快適生活条件、将来のライフスタイルに影響を与えることが解明された。
- \* 2 : 鬼頭(1996)は、人間-自然を「かかわりの部分性」、「かかわりの全体性」について図式化して説明をしている。近代的産業活動以前、人間と自然は、「社会的・経済的リンクと文化的・宗教的リンクのネットワークの総体」とした「かかわりの全体性」を保ってきた。しかし産業発展にともない自然を人間から切り離して認識し、部分的に自然と関わる関係となったと言及している。参考文献7) p130
- \* 3 : 本稿で調査対象とした幼稚園の所在は次の通りである。

〈都市内部幼稚園〉 2園

- \* 世田谷区に所在：東急線自由が丘駅徒歩5分  
交通量の激しい大通り面し、マンションやショッ



ピング街に囲まれ、大きな公園等は近くな  
い。

\* 目黒区に所在：東急線都立大学駅より徒歩5  
分

交通量の多い大通りや住宅街に囲まれ、緑に  
親しむ公園等も近くにはない。

#### ＜都市周縁部幼稚園＞ 2園

\* 八王子市館町：高尾山の近くに所在  
園の目の前は、散策できる緑のコースや山に  
囲まれた自然豊かな場所に立地している。

\* 武蔵野市郊外：武蔵野の郊外に所在  
園の周辺には子どもが遊ぶための大きな公園  
が所在する。住宅に囲まれているが、大きな  
けやき通りもあり、緑に親しむ場所は多くみ  
られる。

\* 4：本調査被験者の年齢構成は以下の通りである。

20-29歳：7.9% 30-34歳：36.9%

35-39歳：40.7% 40-49歳：14.4%

#### 参考文献

- 1) 新広昭, 社会科学的視点からみた人と自然の共生  
とそれを可能にする環境教育の役割, 環境情報科  
学, 28(4), 61-70, 1999
- 2) 海津ゆりえ, 宮川浩, 真板昭夫, 上杉哲郎, 子供・  
親子・高齢者の身近な自然とのふれあい活動に関  
する研究, ランドスケープ研究, 60(5), 647-652,  
1997
- 3) 尾関周二, 現代コミュニケーションと共生・共同,  
青木書店, 1995
- 4) 尾関周二編, 環境哲学の探求, 大月書店, 1998
- 5) 桂川孝子, 日独消費者の比較調査にみる日本人の  
環境行動, 環境情報科学, 28(4), 52-55, 1999
- 6) 加藤尚武, 環境と倫理, 有斐閣, 1998
- 7) カーソン・R.著, 上遠恵子訳, センス・オブ・

サンダー, 新潮社, 1996

- 8) 鬼頭秀一, 自然保護を問い直す～環境倫理とネッ  
トワーク～, ちくま新書, 1996
- 9) 木下勇, 都市との比較からみた農村の児童の自然  
との接触状況～児童の遊びを通してみた農村的自  
然の教育的機能の諸相に関する研究(その1),  
日本建築学会計画系論文報告集, 1992
- 10) 小谷孝司, 柳井重人, 島田正文, 丸田頼一, 幼稚  
園における園児の自然とのふれあいに関する基礎  
的研究～東京都におけるケーススタディ～, 日本  
都市計画学会学術研究論文集, 1999
- 11) 木下孝司, 柳井重人, 丸田頼一, 幼稚園児の自然  
とのふれあい空間としての公園緑地の役割に関す  
る研究, 日本都市計画学会学術論文集, 2000
- 12) 澤村博, 川井昂, 阿部信博, 小山裕三, 青山清英,  
石井晶子, 大学生の成育環境イメージと快適な生  
活環境条件・将来の生活スタイルの及ぼす影響,  
レジャー・レクリエーション研究, 第42号, 1-10,  
2000
- 13) 塩崎勝彦, 義務教育課程における環境教育, 環境  
と公害, 29(2), 10-16, 1999
- 14) 瀬沼頼子ほか, 地域活動をしている農村女性の地  
域環境意識に関する研究－共生意識を中心とした  
アンケート－, 環境情報科学論文集, 35-40,  
1998
- 15) 武田一博, 自然はなぜ保護されなければならない  
のか, 日本の科学者, 28(10), 586-591, 1993
- 16) 広脇淳, 田畑貞寿, 地域特性からみた身近な象徴  
的自然空間の認識とその活用について, 造園雑誌,  
48(5), 282-287, 1985
- 17) 山田善之, 田畑貞寿, 世代間の自然要素に対する  
意識と遊びについて, 造園雑誌, 48(5), 276-281,  
1985